

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K00713

研究課題名(和文)自治体と市民が協働する「地域映画」の活用と発信のための実践的研究

研究課題名(英文) Practical research for utilization and dissemination of "Regional Filming" in which local governments and citizens collaborate.

研究代表者

三好 大輔 (MIYOSHI, DAISUKE)

東京藝術大学・大学院美術研究科・大学院専門研究員

研究者番号：70648443

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：地域映画づくりが生み出すものは、懐かしさを思い起こさせる日常を映したフィルム  
の発見と共に、地域住民が参加する新しいモノづくりのカタチである。市民の持っている表現力やアイデア、記  
憶を集結すれば、心に響く作品づくりが可能である。映画づくりの過程に様々な学びの場を作ることで、市民同  
士の交流があちこちで生まれ、地域映画だけでなく地域社会をカタチづくる一助となっていた。参加した市民  
や映画を観た市民にとって、地域映画づくりが郷土愛を育んでいく活動になっていったことがわかった。これは  
社会的デザインの新しいカタチである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高度経済成長期に市民に普及した8mmホームムービーが、凡そ半世紀ぶりに掘り起こされ、映画として再構築さ  
れた時、

人々は自分たちが生きてきた土地のかつての風景に自分を重ね合わせながら昔を懐かしみ笑い時に涙する。特に  
高齢の方々にはその傾向は顕著に表れており、認知症予防の回想法にも効果的だという指摘もある。音楽療法が  
確立しているように、映像療法なるものになり得る可能性を地域映画は持っている。また、地域社会の崩壊など  
が全国的な課題となっている中で、1本の映画を作る、という大きな目標を掲げて市民が参加していくことは、  
地域の歴史の掘り起こしと共に地域社会の再構築にも繋がり、その社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：Regional filmmaking results in the discovery of films that reflect everyday  
life that evoke nostalgia. It is a new form of creation in which the local residents participate  
together with It is possible to make an emotional film by bringing together the expressive power,  
ideas and memories of the citizens. By creating a place for learning in the process of film making,  
citizens will be able to interact with each other and the community. It was not only a film project,  
but also a way to help shape the community. For participating citizens and those who watched the  
films, local film-making became an activity that fostered love for their hometown. This is a new  
form of social design. This is a new form of social design.

研究分野：映像アーカイブ

キーワード：映像アーカイブ 社会的デザイン 8mmフィルム 地域映画 市民参加 協働 認知症予防 回想法

## 1. 研究開始当初の背景

高度経済成長と共に大衆に広まった8mmホームムービーは、日々の暮らしを生活者の目線で捉えている。一般人が記録した映像であるが故に保存の対象とされてこなかったが、撮影から数十年の時を経て、その文化的価値が認められるようになってきている。例えば、メディアが記録する祭りの記録は、式次第に則って段取りよく無駄を排した構成で記録される。一方、ホームムービーが記録するのは、本殿に行き着くまでの屋台の様子や一緒に行った子どもたちの様子など、撮影者の身の回りの人が被写体となることが多い。生活者の視点が捉えた文化風俗はメディアの記録とは明らかに違うリアリティを持ち、その民俗学的が高まっている。また、ホームムービーには基本的に複製が存在しないため、保存されなかった場合に他に代替するものが存在しない。希少性の観点からも、その価値が再認識されているが、ホームムービーを保存する仕組みは、国内にわずかに存在するだけである。その活動は図書館の古写真収集の延長程度で十分なものとは言えない。

本来であれば、国立映画アーカイブが行うような網羅的な収集と調査を目標とすべきところではあるが、まずはそこに暮らす市民が自らの土地で掘り起こされる映像を自ら楽しみ、味わう機会をつくることが重要と考えた。8mmフィルムを収集してつくる市民参加型の映画づくりを「地域映画」と名付け、地域社会の中で映画づくりを行った。そこで見えてきたものはフィルムに刻まれた街並みや人々の営みの価値と同等に、今を生きる人々が映画づくりに参加し、新たな地域社会を自らが築くことが可能である、と気づくことができる価値である。地域コミュニティの崩壊が全国的な社会課題となっている今、地域映画づくりによる社会的デザインの構築は急務である。本研究は、実践の中から社会的デザインのカチを提案するものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、その土地固有の文化風習を色濃く残した過去の文化資源である8mmホームムービーを、今日の文化資源として市民が参加する活動にデザインし、社会実装の仕組みを提案することにある。2017年度に行った安曇野市の地域映画づくりを検証し、2018年度、大分県竹田市での地域映画づくりに応用させた。安曇野市、竹田市の実践を振り返り、あらゆる世代の市民が参加でき、持続可能な仕組みへとデザインする方法論を検討する。

昭和時代の8mmフィルムを通して、そこに暮らす市民が楽しみ、地域や家族が支えあっていた時代の記録を伝え、地域に活力を取り戻していくことが目的である。一生懸命に生きていた時代の記録は、人々に元気のあった頃の気持ちを思い起こさせると同時に、当時を知らない世代にとっては、かつての賑わいを知り、智慧を使い工夫を惜しまずに暮らしていた親世代、祖父母世代を理解するきっかけになるのである。「鑑賞」することで得られる楽しみと共に、映画づくりに「参加」することが人々の繋がりを生み、地域づくりに繋がっていくことを、本研究で検証していく。

## 3. 研究の方法

映画は大きく分けて3つのパートから出来ている。「映像」「音」「言葉」である。これまでの映画づくりの常識では、監督のイメージを、それぞれのパートの専門家がクオリティの高い表現をすることで作品を創り上げていた、いわゆるピラミッド型の映画づくりである。地域映画においては、ホームムービーという物語の断片の収集から映画づくりがはじまるため、「映像」「音」「言葉」それぞれの素材が集まった段階から完成形をイメージしていく。クオリティの高さではなく、その土地らしさを素材の中から見つけ出していく。逆三角形の一番底辺に監督が居て、市民の「映像」「音」「言葉」を掬い取っていくカタチである。トップダウンの社会構造から、ボトムアップへと社会の構造改革が行われているのと同じことが、この地域映画でも行われるのである。地域映画の実践にあたり、フィルムの収集から完成に至るまで、可能な限り市民参加の場を取り入れるように映画づくりの活動をデザインした。

### <フィルムの収集>

映画づくりは、まずフィルム探すところから始まる。チラシや広報で募集をかけながら、そこに暮らしている市民が持っている情報を拾い集める。例えば「昔、商店街のカメラ屋さんが熱心に8mm回していたよ」というような声である。実際にフィルムを撮影していた人でなくとも、人々の「記憶」を辿っていくことで映画づくりに役立ち、能動的な参加意欲をつくるきっかけになるのである。フィルムが見つかった時には宝物を発見したかのように歓喜する。このようにして映画づくりの応援者ができるのである。竹田市で収集したフィルムは500本を超え、プロジェクトの評判を聞いた市民から未だにフィルムの提供がある状況である。

### <小さな上映会の開催>

その土地の数十年前の姿を、映写機などを使って観る上映会を地域ごとに開催した。町内会の誰もが参加した運動会や、夏になると楽しんだ水泳大会、お祭りやSLが走った日の熱狂など、その土地に暮らしてきた人たちが経験してきた出来事がスクリーンに映し出されると、同時に自分たちの記憶が呼び覚まされ、「運動会の弁当はいつも手巻き寿司って決まっとったな」「じいちゃんは朝から酒を飲みながら観ていたな」など、映像に映っていた周辺の記憶を語り出すのだ。たまたま上映された50年前のパレードのフィルムの中に中学生の自分が映っていた、という想定外の偶然も起こり、その奇跡的な中学生の自分との再会に心躍らせるのである。また、小学校の水泳大会のフィルムを上映するために、同級生が集まったり、高校の文化祭の時に作った映画を観るために同窓生が遠く広島から駆けつけてきたりする場合も生まれる。40代となったある男性は小学生の子供を連れて上映会に参加し、若かりし頃の自分の姿を息子と共に見るのである。小さな上映会は、フィルムが撮影された時代の関係性を今に再生することを可能にするのである。

#### <インタビュー撮影>

8mmフィルムの提供者にインタビューを行った。インタビュアーは地元の高校生と大学生。提供されたフィルムを事前に観て当時のお祭りや市民運動会について調査し、質問事項を考えインタビューに挑んだ。受けるのは80代90代の高齢の方々が多いけれど、若い子どもたちの真剣な眼差しに、真摯に答えていた姿が印象的であった。地元の方にその土地の話聞く機会は、近所に暮らしていても、なかなかきっかけを得ることが難しいが、8mmフィルムを介して対話する場をつくるのが可能となり、地域文化の継承としても有意義な時間となった。

#### <音楽録音>

映画の音楽を奏でる市民を募集した。映画の自由な活用を前提としているため、耳馴染みのある童謡唱歌の中の著作権消滅曲(Public Domain)を候補曲とし、演奏家と相談しながら選曲を進め録音した。参加したのは、小学4年生のピアノ演奏、小学生の合唱団、トランペット奏者、琴、フルートの演奏家、ラップグループである。中にはまだ練習途中の演奏もあったけれど、一生懸命に曲の中に入り込んで弾いている音が、時に人の心を惹きつけることもわかった。そのような音は、8mmカメラを一生懸命上手に撮ろうと研究を重ねていたかつてのお父さんたちの眼差しと親和性が高く、心に届く表現に繋がることを発見した。

#### <効果音づくり>

8mmフィルムのほとんどはサイレントで記録されている。無音である。8mmフィルムは今のデジタルカメラのように、撮影してすぐに内容を確認することはできなかった。撮影後、カメラ屋に出したフィルムは数週間後に現像済みフィルムとして戻ってくる。それを映写機にかけて初めて映像を確認することができるのである。(デジタルネイティブの世代には理解するのが困難であろう。)家庭での上映は襖をスクリーンにし、部屋を暗くして家族で話をしながら観るのがホームムービーを楽しむスタイルだった。今回、サイレントの映像に「音」づけする作業を小学生たちと行った。まず、予め準備しておいた30秒ほどのサイレントの映像を観て、そこにどんな音が必要なのかを書き出す。そしてその音を作るために必要な道具を考え、翌日に持ち寄る。映像を観ながら音を一つずつ録音し、音の種類や質感に感覚を集中させながら、音を表現していく。音のタイミング、バランスを整えて完成。サイレントの映像が生き生きと蘇る瞬間である。餅つきや自転車で近所を走る姿など、当時の暮らしに思いをよせながら、表現者としての感覚を研ぎ澄ませていく体験となった。

#### <映画づくり>

映画が始まる前、止まっていた写真が幻投として光で映し出されてから、ゾートロープ、ソーマトロープなどの映像体験を経て映画に至るまでを実際にフィルムなどに触ってもらいながら解説し、映画の仕組みを学んだ。その上で、映画のカウンtrリーダーとなるアニメーションとエンドロールに使う映像を8mmフィルムで撮影・現像した。スマホなどが当たり前の映像体験となった今、改めてアナログな時代の映像づくりを行うことで映像の原点を体験してもらうことが目的であると同時に、地域映画の一部になることも意識して行った。簡易現像を行なった後の上映では、自分たちの姿がスクリーンに映し出される感動を味わった。

#### <ポスター制作>

完成上映会に向けて、地元小学校の3年生クラスと6年生クラスそれぞれ25名が、8mmフィルムの画像をカラージュするポスターを制作した。まず、50年前の8mmフィルムを実際に見たり、撮影者の話を伺ったりしながら、地域映画についての理解を深めた。その上で与えられた数十年前の画像を選び、当時の街の様子や人々の表情に思いを馳せながら切り取り、画用紙に貼り付けていった。50名の個性がありながらも、写真のカラージュという手法による統一感が生まれたポスターとなった。これらは街中のお店や公共機関に張り出され、完成上映会への告知に大きく貢献した。

#### <完成上映会の開催>

完成上映会を新たに完成したばかりの市民ホールで行った。予想を超える 500 名以上の市民が集まり大盛況となった。会場には映画づくりで使用した機材の展示やポスターの展示、昭和の懐かしいおもちゃなどを市民が展示し、昭和の懐かしい空間で来場者を楽しませました。シンポジウム、提供者の紹介、演奏家の実演、メイキング映像の上映に続き、地域映画の上映が行われました。同じシーンを観ていても、笑顔になる人もいれば涙する人もいます。それぞれの思い出に重ね合わせながら、この地域映画を観ていたに違いない。映画制作に参加したのは 300 名を超える老若男女の市民。

#### 4. 研究成果

安曇野市、竹田市での実践により、地域映画づくりが生み出したものは、懐かしいフィルムの発見と共に、地域住民が参加する新しいモノづくりのカタチの発見である。映画づくりは映画監督をはじめ、それを生業としてきたプロフェッショナルによってのみ実現するものと思われてきている。しかし、市民の持っている表現力やアイデア、記憶を集結すれば、プロが作る映画以上に心に響く作品づくりが可能であることがわかった。世代を超えた市民が参加することで、これまでになかった市民同士の交流も生まれ、地域社会の中で地域映画づくりをカタチづくることができた。一つの「映画を作る」という共通の目標に向けて動くことは、地域社会にとって何よりも大きな原動力となり、市民の暮らしの中に地域映画づくりが入り込み、地域づくりで一番大切にしなければならない郷土愛を育てていく活動となっていった。

また、映画づくりには様々な学びの場が作れることもこの研究を通して検証することができた。映画づくりに市民参加の場を作ることで、市民それぞれが自分の持っている力を持ち寄り、映画づくりに関わりながら地域社会を育てていくことが、今の地域社会に求められていることである。今後はさらに多くの地域で地域映画づくりの実践が行われるであろう。全国の自治体の地域性や規模、特性を理解しながら、それぞれに対応しカタチに順応できるプログラムづくりが次なる課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

地域映画として2本の映画を発表した。  
 地域映画「よみがえる安曇野2」製作：あづみのフィルムアーカイブ 監督：三好大輔 制作年：2018年（48分）  
 地域映画「竹田ん宝もん」製作：タケハチシネマプロジェクト 監督：三好大輔 制作年：2019年（分）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	須永 剛司  (SUNAGA Takeshi)  (00245979)	公立はこだて未来大学・システム情報科学部・特任教授    (20103)	
研究分担者	川嶋 稔夫  (KAWASHIMA Toshio)  (20152952)	公立はこだて未来大学・システム情報科学部・教授    (20103)	